

かけがえのない毎日

黒沢 賢一

小さな塾を開いている。

その年のカレンダーが、残り二枚になろうとしていたある日の夕方、一人の女子高生が塾を訪ねてきた。

近くの高校の制服なら大体はわかっているつもりなのだが、その子の制服はそれまで見たことがない。

「年明けの看護学校入試を受験するのですが、今からでも塾に入れますか」と言う。

入試までは、残り二か月あまり。

「残された時間はわずかですが、いっしょにがんばってみようか」

そう返事をし、その日から入試に向けた勉強が始まった。

看護学校の入試科目は、英語、数学、国語、生物。小論文や面接、集団討論が出題されることもある。

倍率は毎年、三倍程度。なかなか大変な試験である。

進学校といわれる高校に通っているわけではない。勉強が得意というわけでもない。

はじめから、看護師をめざそうという思いがあったわけでもない。

合格するのは、ちょっと難しいかな、と思う。

それでも、その子は、ひたむきに勉強を続けた。

もくもくと机に向かって問題を解く。うまくいかない、消しゴムで消し、また解き始める。

その子の机の上には、あつという間に、消しゴム一個をすべて使い切ってしまったよな、ものすごい量の消しカスが積み上げられていった。

消しカスは、努力の証しだ。

「今日は、ここまで」

勉強が終わると、その子は必ず、消しカスを手のひらに集め、ゴミ箱に捨ててに行く。すると机は再び、だれも使ってなかったような姿を取り戻す。

年の瀬の時間は、いつもより早く過ぎていく。

まもなく新しい年を迎えようとしていたある日、その子は、授業の合間にポツリと話してくれた。

「震災で家がメチャクチャになってしまい、後片付けをしていたら、突然、避難するように言われたんです。みんな二、三日で帰れるだろうと思って、貴重品と着替えだけを持って家を出たら、二度と戻れない場所になってしまっ……」

その子の家は、事故を起こした福島第一原子力発電所のすぐ近くにあった。今もまだ帰還困難区域とされ、立ち入りが制限されているところで、帰れる見込は立っていない。ふるさとを追われ、プレハブの仮設住宅で暮らしていたその子は、あの日以来、一度も家には帰れず、住み慣れた家を思い出しながら、こんな言葉を漏らした。

「大切にしていたものがどうなっているか……。せめて、小、中学校の卒業アルバムだけは取って来たいんですが」

目には、うつすらと涙が浮かぶ。

沈黙が続いた。

私は言葉を繋ぐことが、できなかった。

どれくらい時間がたっただろう。

その子は、背筋をぴんと伸ばして、力強く言った。

「でも、避難先でたくさんの人に親切にしてもらい、体調を崩した人のために働いている看護師さんの姿を見て、私も看護師になって、あの時の恩返しをしたいと思うようになったんです」

その口調からは、固い決心が伝わってくる。

それが、看護学校入試に向けて勉強を始めた理由だと知った。

「少し前までは、まったく考えてなかった進路なんですけど、これって不純でしょうか？」
うつむいて、その子はもの静かに言う。

不純である、はずがない。

それは、住む家を追われ、それまでの日常を奪われて、絶望のどん底に突き落とされ

た、人生の大きな試練の中で見つけ出した一筋の希望である。

入試を目前に控えた最後の授業の日、「がんばれ」と一言だけ声をかけて、教室を出るのを見送った。

やれることは全部やった。どんな結果が出て、私にも悔いはない。

二人で駆け抜けた二か月が終わった…。

どんな境遇に置かれていても、時は止まっていない。時は、いつも明日に向かって、ひたむきに進み続ける。

立春が過ぎて、私塾のそばの梅がぼつりぼつりと花を咲かせ始めた頃、その子から連絡があった。

「受かりました！」

十八歳の少女には抱えきれないほど、たくさん試練を与えられ、ふるさとを追われた悲しみと将来への不安を背負いながらも、新しい人生への扉を自らの手でこじあけた瞬間だった。

明るい、喜びの声は、すぐに涙声になり、そして何も話せなくなった。

あれから七年。彼女は看護師国家試験に合格し、復興の途上にある被災地の病院で看護師として働いている。

大地震、大津波、原発事故による放射能汚染。

まさか、自分が生きている間に、千年に一度と言われるような巨大地震に遭遇し、大津波が押し寄せ、絶対に事故は起きないという安全神話で塗り固められてきた原子力発電所が爆発して放射能が撒き散らされることなど、夢にも思っただけでなかった。

十五年近く続けてきた私塾は、鉄筋コンクリート造りの強固な建物だったが、マグニチュード九の地震には耐えられず、室内にはありとあらゆるものが散乱し、壁は壊され、天井は破れ、建物は「危険建物」と書かれた赤い紙が貼られるほど崩壊し、子どもたちの笑顔があふれていた教室は、二度と子どもたちが足を踏み入れることができない場所になった。

大津波は、教室のすぐそばまで来て、昨日までそこにあつた集落はまるごと流されて、一瞬のうちに消えてしまった。

追い打ちをかけたのが放射能だ。私塾があつた場所にも放射能が降り注いで、避難を

余儀なくされ、着の身着のままの状態に住み慣れた場所を離れざるを得なくなった。

原発から七十キロの場所にあった私塾周辺の放射能の数値が下がり始めた頃、避難先から戻った。

それまで塾を開いていた地域は地震によって壊滅的な被害を受けて、どの建物も使える状態ではなかったために、やむを得ず、少し離れた町に仮設教室を設けて、いつでも指導を再開できる準備を始めたのだが、放射線量はその後、なかなか下がっていかず、教室は設けても、生徒を集めることができない状況が続いた。

生徒のいない教室ほど寂しいものはない。

毎日、放射線量を計測しながら、だれも座っていない机とイスを眺める日々が続いて、私塾の存続を断念しようかと考えていたその時、教室をぶらっと訪ねて来たのが、看護学校入試を受験したいという彼女だった。

彼女だけではない。原発事故後、「放射能が怖い」と言って医師や看護師が次々と福島を去っていき、地域医療の崩壊が大きな問題となっていた時に、「看護師になって地域医療に貢献したい」と言う高校生、社会人らが続々と集まってきたのだ。

仮設住宅やワンルームの部屋に家族みんなで身を寄せる原発のそばから避難して来た高校生。津波で家が全壊してしまった高校生。震災で職を奪われ、看護師として新たな人生を歩み出そうと決意した社会人。

さらに、震災の時に警察官が被災した住民のために汗を流す姿を間近に見て、「警察官になって福島に貢献したい」という高校生もやって来て、背中を押されて私塾の再開を決断した。

私が教壇に立ち続けてきたのは、もしかしたら、この子たちに出会うためだったのではないか、と考えさせられた。

そして今。教室は仮設教室のままだが、それでもたった一つだけの小さな教室から、看護師の卵を。警察官、消防官を。町役場、市役所、県庁で働く、これからの福島の復興の担い手となる人材を、毎年、送り出している。

私の平成―。それは、平凡な日常がいかにかけがえのないものであるか、ということを教えられた時代だった。朝起きて、それぞれの生きる場所で一日を過ごし、夜になると元気に家に帰って来る…。この、ありきたりの日常こそ、何にも代えられない幸せな

のだ。

また人は、どんな困難も乗り越えていく力を持っていることも知った。二度と抜け出すことはできない。そう思わされるほどの絶望の淵からも、人は必死に希望の光を探し出して、必ず這い上がることができる。

そして決して忘れてならないのは、自然災害のように、この世には人の力ではどうにもできないものがあるということだ。

時代が変わっても、いつ、どのようなことが私たちの身に降りかかってくるか、わからない。平成という時代に私たちが経験したことのすべてを、次の時代を生き抜いていく教訓としなければならぬ。